

# 生かされた わたしの役目

宮城県南三陸町（八崎三陸管内）  
松野三枝子 57

きずなの力  
～被災地からの便り～  
構成●市川隆 写真●鈴木加寿彦

東日本大震災の発生以降、被災地の様子を、連載「きずなの力」で伝えてきました。今月号からは、「きずなの力～被災地からの便り～」として、被災地で生きる人たちの生の声を届けていきます。今回の便りは、甚大な被害に遭った宮城県南三陸町で、かんを思い、むかからも農業と総菜直売を続ける松野三枝子さんからです。





# あ

の日からちょうど半年の九月十一日。南三陸町では、高台の体育施設ベイサイドアリー

ナに約二千人が集まって、合同慰霊祭が行われました。でも、わたしはあえて出席せず、県北の大崎市岩出山で開かれた政宗公祭りの会場にいました。

「南三陸のおいしい海のご飯はいかがですか〜！」

と明るく声を張りあげ、バックに詰めた自家製のうに飯、ほたて飯、海鮮焼きそばなどを、夫といっしょに売っていたのです。

式典に参列したら、きつとまた泣き崩れてしまう。目を閉じれば、すぐ近くまで押し寄せてきた真っ黒な津波、まだ遺体が見つからない父、流された実家のことなどを思い出します。被災を免れたわたしの家には、津波で自宅をなくした親戚がおおぜい避難してきました。その世話に明け暮れた日々のつらさも、よみがえってくるにちがいません。それだつたら、笑顔を振りまいて節目の一日を過ごしたほうが自分らしいと思いました。

何年も前からわたしは、週に三日程度、仙台のデパートや各地のイベント会場に出向き、南三陸の農水産加工品を直売しています。「南三陸の元気なおばさん」と呼ばれ、顔見知りの常連客もたくさん

ご来店ください。



目を閉じれば  
思い出してしまおう。  
それなら、笑顔でいた  
ほうがわたしらしい。

まつの・みえこ  
1953年、宮城県志津川町(現・南三陸町)出身。米やダイコン、ハクサイなどの野菜を栽培するかたわら、漬け物などの加工品や、地元産のホタテやウニを使った海鮮ご飯を各地で販売している。「南三陸志津川海の市物産組合」代表、JA南三陸女性部志津川支部支部長も務めている。



震災で、直売の仕事は一時完全にストップし、わたしは人と会うことが怖く、スーパーへの買い物も息子に頼んで行ってもらうほどふさぎ込んでしまいました。

しかし、四月になると、わずかに残った物産を集め、地元で市を開こうという話が町の有志の間で持ち上がり、わたしにも声がかかったのです。ただの復興ではなく、南三陸が震災前よりも幸福になれるよう「復興市」と名づけました。ありがたいことに、テントなど必要な資材や備品は全国各地から届きました。

四月二十九日の第一回復興市には、避難して散り散りになった町の人も、それが踏み分けて戻ってきました。そしてそのとき、わたしは、山形県高島町からの出店のお誘いを受けるべきか、佐藤仁町長に相談しました。若い頃からわたしが「ジンさん」と呼んできた町長は、「おめえはどうせ町内に収まるオナゴでねえ。外<sup>で</sup>出張<sup>て</sup>って商売しながら、この南三陸のすごい状況を報告してこい」

背中を強く押してくれたのです。

五月には、高島町に続いて村山市、山形市、長井市、中山町など、山形県の各地に出かけました。どの町でも、被災地の一品を買い求めようとたくさんの方が来てくれました。一パック三百円の炊きこみご飯に五百円玉を差し出し、「少ないけど義援金に」と、お釣りを受け取りません。



背後で復旧作業が続くなか、仮設住宅の脇に設置された松野さんの野菜の直売所。志津川に唯一ある仮設の薬局もあるので、地域の人やボランティアで来ている人が頻繁に立ち寄り、世間話をしている。

地元の出店者からは、町に届けてほしいと三十キロの米袋やリンゴ、お見舞い金まで預かりました。中山町では、わたしの体調を気遣い、イベントの前日と最終日は近くの温泉に泊まって休養できるように、宿を手配してくださいました。行く先々で出会う心温かい人たちには、感謝の気持ちでいっぱいです。

スリムな体型、俊敏な身のこなし、張りのある声——南三陸の元気な女性そのものの松野さんだが、五年前に「スキルス性の胃がん」と診断され、胃の全部と食道、脾臓、胆のう、リンパ節などを摘出。さいわい手術は成功したものの、服薬と治療は今も続く。

三月十一日は、海岸から二百メートルほどの志津川病院にいました。二か月に一度の輸血治療が終わり、三階で入浴中に大きな揺れに襲われたのです。駆けつけた看護師さんに言われて入院患者用のパジャマを着ていたため、わたしは優先的に屋上まで引っぱり上げられました。

病院の屋上のすぐ目の前を、中に人が乗った乗用車、人がしがみついた冷蔵庫庫見覚えのある家が、どんどん流されていきました。たまたま体調を崩して入院していた八十八歳の父は、そのとき三階の病室にいて、ベッドに横たわったまま津波にのみ込まれ、どこかに運ばれてしま

ったのだと思います。

病院で生き残ったわたしたちは、氷一かけらと柿の種一粒で一昼夜を過ごします。翌朝、消防団に助け出されましたが、入院患者はすべて別の病院に移送すると聞いて、わたしは脱出を決意。服を着替え、同じ方向に帰宅する看護師さんに付き添ってもらって、がれきを乗り越えながら二時間半歩いて、自宅に戻りました。

## 二十八人の炊事

海から離れている自宅や田畑、作業場はほぼ無傷でした。屋根にソーラーパネルの発電システムを設置してあったおかげで、停電中も冷凍庫が使える、そこに商売用の食材が大量に保存されていました。野菜は自給でき、井戸水、プロパンガスが使える、風呂は薪で沸かせます。被災地とは思えないふだんの生活が可能でした。そのため、津波で自宅をなくした親戚がおおぜい避難してきました。本家の長男の嫁であるわたしは、無我夢中で毎朝三升の米を炊いて二十八人分の朝食と弁当を作り、昼間は田畑の仕事を続けました。ここ志津川では昔から、海岸近くに住んで漁業や商業を営む「海の人」、内陸側で農業や林業に従事する「山の人」という呼び分けをします。わたしは海に面した志津川市街地で、父が精肉、母が野菜を売る商家に育った「海の人」でした。

兄は漁船に乗っていました。それが、十二歳のときに五つ年上の「山の人」と知り合い、十九歳で結婚しました。

農業の経験がまったくなかった松野さんは、農業改良普及所に一年通って野菜作りを学び、葉タバコと養蚕に替えて、露地とハウスで野菜栽培を始めた。今も小型トラクターで台車を引き、堆肥をまく作業を一人でこなす。JA南三陸女性部志津川支部の支部長でもある。

農業はおもしろいです。つねに勉強が必要ですが、手をかけた分だけ結果が返ってきます。野菜の直売スタンドは、プレハブの仮設商店街の片隅にも設置しました。朝に収穫した野菜は、仙台などでのイベント販売でも商品として並べます。栽培した作物の多くは、加工して販売しています。たとえば、一粒の種からダイコンを育て、それを漬け物にして売るのは、とても楽しいことです。「海の人」からじかに格安で仕入れた規格外のウニやホタテを、自分で作った天日乾燥のはぜ掛け米で炊きこんだうに飯やほたて飯の味には絶対の自信があります。

今は津波の影響で、地元のウニやホタテは手に入らず、昔からつながらりのある青森の漁師さんに頼み、やはり規格外のものを特別に送ってもらっています。でも、志津川湾から魚は逃げ出していない

直売のイベントでは、おもに仙台市や山形県の各地に出向き、総菜や漬け物などの加工品、朝採りの野菜を販売する。畑で栽培する野菜は、加工に適した品種の多品目・少量生産を心がけている



## 家族やまわりの人たちの支えで命をつないでいます。

ん。脂のつた銀サケなどが泳ぎまわっています。

これから冬に向かって、道路が凍結するので、イベント販売はしばらく休み、小さな農家レストランを自宅近くの道路沿いで始めようと思っています。南三陸町では飲食店も津波で壊滅し、ボランティアの方たちが食事をする場所が足りません。地元の新鮮な食材を使った食べ物を提供したいのです。

### 末期がんでも生きる

わたしは末期といわれたがんで生き残り、こんどは津波で九死に一生を得ました。きつと、生きてなにかをするお役目を与えられたのだらうと思っています。とはいえ、薬がないと食事でもできない病人であることに変わりはなく、家族やまわりの人たちの支えで命をつないでいます。震災直後、息子はガンリンをかき集め、仙台市内の病院に薬を取りに行ってくれました。

イベント販売への行き帰り、わたしは体がつらく、たいていワゴン車の後部座



席で横になっていきます。ハンドルを握りながら夫が、ときどき「生きてつか」とわたしに声をかけます。眠っている間に呼吸が浅くなったり、無呼吸になったりするからです。長く林業会社に勤めていた夫は、突然解雇され、しばらくはうつ状態でしたが、今ではイベント販売も畑仕事も助けてくれます。

親戚が大挙避難してきて、その世話で気持ちが悪パンパンになっていたときには、「すこし休んでこい」と鳴子温泉まで送り届けてくれました。ひと言どころか二言も三言も多いわたしに、絶妙のタイミングで「いいかげんにしろ」とくぎを刺すのも夫だけです。

夫とわたしは二輪車。夫がいるから、わたしはくるくる回り続けることができます。わたしのどかと思っています。